

## 〈はじめに〉

数週間前、ふと立ち寄ったコンビニのDVD売り場で、思いがけず懐かしい映画に再開しました。「飛べ、フェニックス」という映画です。三十数年前、まだ小学生だった頃、TVの洋画劇場で放映され、たった一度観たきりなのに、繰り返し思い出される映画でした。砂嵐に巻き込まれ、サハラ砂漠に不時着してしまったセスナ機の乗員たちの物語です。飛行機は大破し、救助の当てもなく、皆が絶望にくれる中で、一人の風変りな男が、壊れた飛行機を使って、新しく飛行機を作ろう、と提案します。荒唐無稽、と熟練の機長は一蹴しますが、乗り合わせていた医者が、たとえ夢のような話でも、人間には最後まで希望が必要なのだ、と説いて、男たちの飛行機作りが始まります。◆今回お話しする「読解」というテーマに引き寄せて考えるとき、医者語った、「希望」という言葉は、「問題解決」という言葉に、置き換えることができます。なぜなら、人間は、生まれながらに、自ら問題を設定し、その解決を希求する生きものだからです。私たちが文章を読み進める最大の動機も、その先を知りたい、解りたい、という気持ちである、と言われていています。そして、それは、人が生きて行くことの本質とも、重なり合うものです。砂漠の中の男たちは、死と隣り合わせであるはずの過酷な労働の中に、物を作り上げる喜びや達成感を見出して、その命を繋ぎます。◆個人的には、砂漠に行ったことも、アフリカに行ったこともないし、遭難したことも、飛行機を作ったこともありません。きっと、これからも、多分、ないでしょう。けれど、そのように個人の経験とはかけ離れたひとつの物語が、たとえば「勇気」や「創造」の象徴として、心の中に生涯在り続ける、ということは素晴らしいことだと思います。ただ、その素晴らしさを手に入れるためには、一定のプロセスと、技術が必要です。それは、まず、物語や作品というものを、自分の外側に認知することから始まり、その世界に入っていくための通路を、切り開かなければなりません。そして、通路の先に広がるファンタジーの世界を、よりよく生きるためには、小説や映画、マンガ、演劇、舞踏…それぞれに異なる表現の文法を学ばなければなりません。◆いま、ファンタジーの世界を“生きる”と書いたのは、比喩ではありません。読むこと、観ること、は、架空の世界を通して、他者と繋がって行く行為だからです。一生をかけても巡り合えない体験を、作品の中で体験し、それが生きることの糧になるのであれば、そこは、私たちが常日頃、現実と感じている世界よりも、よりリアルな世界である、ということもできます。誰かが紡いだ優れた物語は、時と場所を超え、人間の心を結び、不確かで不安に満ちた日常生活に、確かな手応えを与えます。ああ、やっぱり私は、あの人と同じ世界で暮らしているのだな、と。そのような今を確かにする、物語の体験を、子どもたちが少しでも、持ち得てくれれば、と思います。